切り絵　『鶴』　比企善彦 作

うぶすな

茨木神社社報
発行所
茨木神社社務所
茨木市元町4−3
072(622)2346
https://www.ibarakijinja.or.jp/

「時代（とき）をつなぎ、心をつなぐ」

当神社の三柱の大神様を祀る本殿が現在地に創建された元和八年（一六二二年）から数えて、今年は丁度四百年目の年を迎えます。

この佳節を祝して進めてまいりました修復・造替事業も本殿上に千木・鰹木が据えられ、いよいよ完成に近づいてきました。

この度の造営について、本殿（ご神座の社）は、これまでの時々の修復と同様に損傷箇所のみの修復としました。一方、幣殿（祝詞座の社）及び拝殿（参拝者着座の社）は、明治十三年（一八八〇年）の建築で約百五十年が経ち損傷が著しく、また高床であり昇降の不便解消のため土間として全面造替しました。

しかし幣殿の天井は、本殿正面の荘厳な意匠を拝観するため「破風天井」という特徴ある工夫がされていることから、そのまま古材を用い、また随所に先人達が用いた工法や飾り物を用いるとともに、基壇上の昭和十五年の皇紀二千六百年を記念して設置された石玉垣も、次代に伝えるべく先人の「こころ」を踏襲しました。

私達の先人達は、その時代における義務として、また感謝と誇りを感じて修復を繰り返し実施して、今日に伝えてこられました。私達も感謝を込めて次代へ引き継ぎたいと願うものです。

茨木神社の歴史

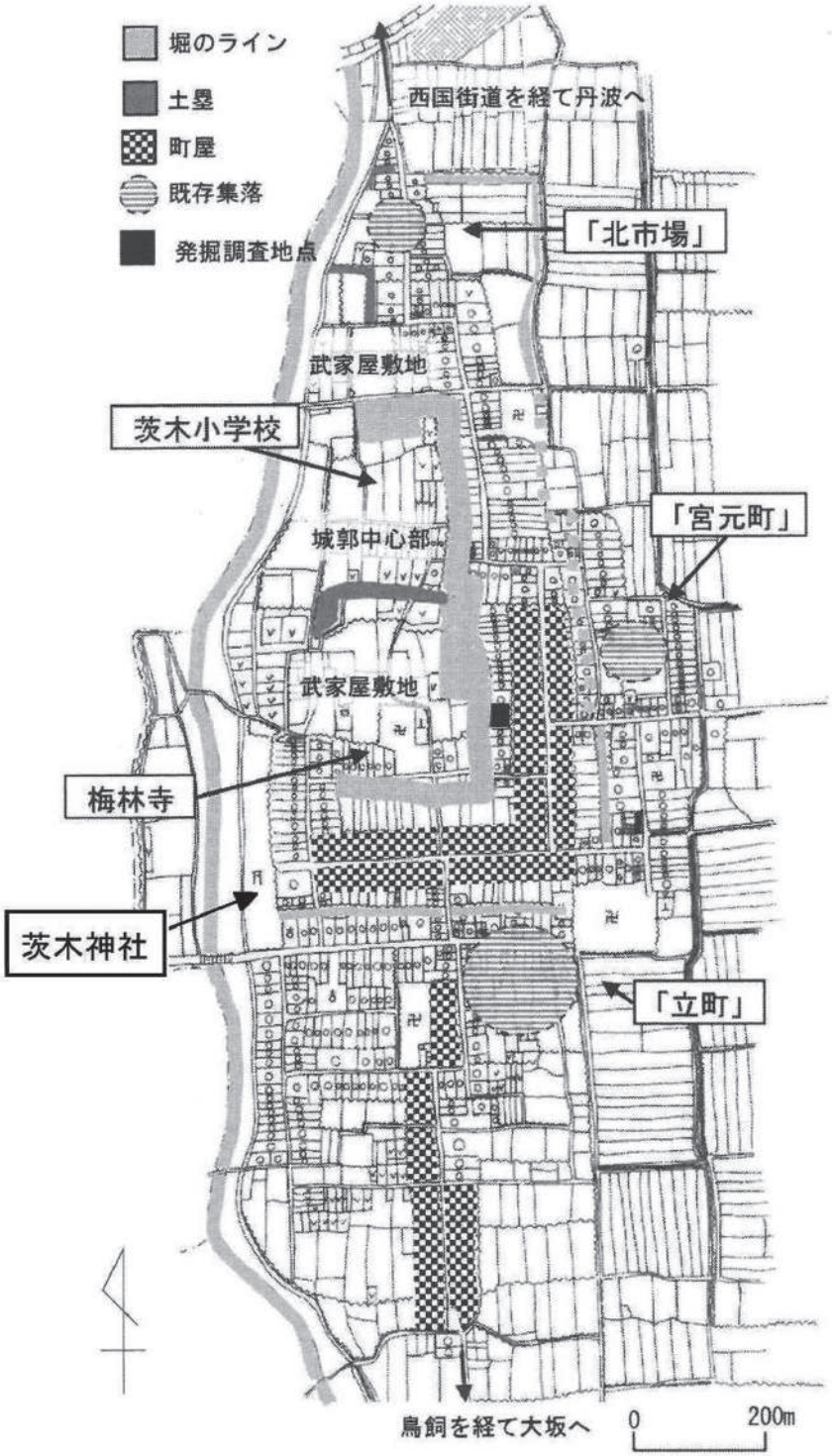
～御本殿創建四百年記念事業「令和の大造営」の完遂にあたって～

当神社の成り立ち

当神社の創祀は、「大同二年（八〇七年）坂上田村麻呂が荊切の里をつくりしとき天石門別神社が鎮座された」と伝えられています。荊切の里は、現在の宮元町付近と想定されています。

また、平安時代中頃の延長五年（九二七年）に編纂された「延喜式」巻第九」にその名が記されており、当時、官幣社として尊崇されていた神社でありました。

時が経ち、鎮座から約四百年後の鎌倉時代に作成された、茨木村付近の土地売買に関する文書を見ると、この頃には周囲の開発と荘園化が進み、人口も大幅に増加したであろうと思われます。鎌倉時代の弘安七年（一二八四年）に奈良西大寺の僧叡尊が、自身の日記に「三日間茨木村に滞在し、近在の四九〇人に菩薩戒を授ける」と記しており、この頃には人口の増加及び村の拡がり、そして茨木村が農村的集落から多くの人々の生活を支える商業の混成した町へと拡大発展していたことが伺えます。



【図】茨木城下町復元図
（中西裕樹『大阪府中世城館事典』119頁を一部加工）

御祭神の勧請

現在、当神社本殿には「素盞嗚尊・春日大神・八幡大神」の三神をお祀りしております。これら三神はいつ頃、何処に、どんな願いでお祀りされていたのでしょうか。

まず今日の宮元町付近に人々が住み、その地に「天石門別神社」が奉斎されました。その後、時を経て開発・開墾が進む中で、中世の地割から、今日の大手町付近にも茨木村の分村が形成されたと考えられます。（【図】茨木城下町復元図の「立町」がそれに該当すると考えられます。）そして、農村的集落であるこの分村に、「素盞嗚尊・春日大神・八幡大神」の三神が順次お祀りされてきたと考えられています。

・素盞嗚尊の奉斎

素盞嗚尊を奉斎するに至る経過については、平安時代後期に度々疫病が流行したことと大きく関係しているのではないかと考えられます。疫病は家族だけでなく村社会をも破壊させるという脅威がありました。朝廷では正暦五年（九九四年）畿内の主な神社にて、直々に疫病退散の祈願をさせており、茨木でも新屋神社において天皇の使者によって斎行されました。このような状況下で、当村でも疫病から自身や村を守るべく「素盞嗚尊」を奉斎するに至ったと考えられます。

・春日大神の奉斎

次に春日大神の奉斎についてですが、平安時代後期から鎌倉時代にかけて茨木村周辺では有力貴族、特に藤原氏による荘園化が進んでいました。その過程で、藤原氏の氏神である「春日大神」を奉斎し、精神的に結び付きを強めたと考えられます。藤原氏の荘園が多く存在した平地部に春日神社が多く見られるのはこのためです。

・八幡大神の奉斎

「八幡大神」は、平安時代末頃、源義家が石清水八幡宮で元服したことから武士達に信仰された神です。室町時代中期頃、茨木村でも「茨木氏」と名乗る地侍が歴史に現れ、近隣の地侍の中心的な存在となって活躍しました。全国各地で割拠する国人・地侍が八幡大神を招いて八幡社を建立したと同様に、茨木氏が八幡大神を奉斎したと考えられます。

現在地への奉遷

城下町の形成過程で、まず宮元町に鎮座する天石門別神社が現在地へ遷座されました。続いて大手町付近に祀られていた三神が現在地へ遷座されました。

当神社に伝わる文禄二年（一五九三年）の棟札に「奉葺替茨木氏神三社相殿春日大神素盞嗚尊」と記されています。

文禄２年棟札

この棟札において三社相殿であるにもかかわらず、「春日大神」と「素盞嗚尊」の二神しか記されていないことから、記されていないもう一神は「天石門別大神」と推定されます。つまりこの棟札から分かることは、まず初めに「天石門別大神」が宮元町から現在地に奉遷され、その後に「春日大神」と「素盞嗚尊」の二神を天石門別神社の社殿に合祀したものだと考えられます。

また本棟札には「別殿八幡大神宮」と書かれていることから、文禄二年時点では「素盞嗚尊・春日大神」の二神とは別の社殿に八幡大神が祀られていたと考えられます。

この棟札が制作された年から二十九年後の元和八年（一六二二年）、天石門別神社を奥宮とし、新たに「素盞嗚尊・春日大神・八幡大神」の三神を祀る社殿を建設して本殿としたのです。今年はまさにそれから四百年目の佳節を迎えるのです。

四百年間の「本殿」造営史

元和八年（一六二二年）より現在に至る四百年間、当神社本殿に関する棟札が多く現存していること並びに福井大工組の記録である上田重一家文書から、屋根の葺き替えや修理などの造営の様子を詳しく把握することが出来ます。これら棟札や古文書から四百年間の「本殿」造営史をまとめたのが【表】になります。

この表からも分かるように、約三十五年に一度、屋根の葺き替えを実施していることが分かります。

【表】御本殿造営年表（及び関係する棟札）

・元和の大造営【元和八年（一六二二年）】

天石門別神社に素盞嗚尊及び春日大神が合祀されていたが、この年に本殿が新たに造営される。（屋根はおそらく柿葺。）これにより中央に素盞嗚尊、向かって右に春日大神、向かって左に八幡大神を奉斎する現在の本殿形式が確立する。天石門別大神は、二〇メートルほど北に遷座申し上げ、奥宮とした。

元和８年棟札

・宝永の葺替　【宝永二年（一七〇五年）】

本殿の屋根葺き替え

・元文・寛保の葺替【元文五年～寛保元年（一七四〇～一年）】

本殿の屋根葺き替え（柿葺から檜皮葺へ。これ以降昭和四年まで、全て檜皮葺。）

寛保元年棟札

・安永の大造営【安永四年～五年（一七七五～六年）】

本殿が「建修復」された。瓦葺きの祝詞門が正面に新建された。土蔵や社人詰所が新建されるなど、本殿周辺の様子が大きく変わった。また本殿の屋根が葺き替えられた。

安永５年棟札

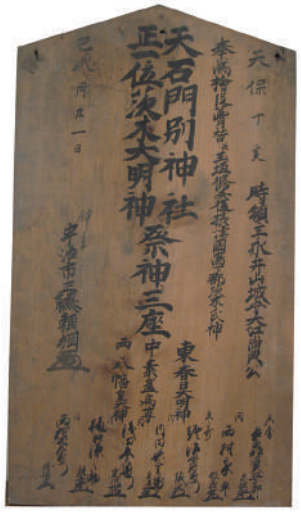
・寛政の葺替【寛政四年（一七九二年）】

本殿の屋根葺き替え

寛政４年棟札

寛政年間の当社の様子

・天保の葺替【天保一〇年（一八三九年）】
本殿の屋根葺き替え



天保10年棟札

・明治の葺替①【明治二年（一八六九年）】
本殿の屋根葺き替え

明治２年棟札

・明治の造営（幣殿・拝殿）【明治十三年（一八八〇年）】
幣殿・拝殿を新建（檜皮葺。以後昭和四年まで全て檜皮葺。）

明治13年棟札

・明治の葺替②【明治三十年（一八九七年）】
本殿の屋根葺き替え

・明治の葺替（幣殿・拝殿）【明治四十二年（一九〇九年）】
幣殿・拝殿の屋根葺き替え

・昭和の葺替【昭和四年（一九二九年）】
本殿・幣殿・拝殿全ての屋根を銅板葺に葺き替え

昭和４年棟札

・平成の改修【平成五年（一九九三年）】
本殿内陣の改修新装工事

昭和４年頃の当社の様子

御本殿創建四百年記念「令和の大造営」について

・工事の進捗状況

令和三年十一月十二日に上棟祭を斎行した後、屋根の野地板張りが翌年二月にかけて行われました。そして、三月から拝殿より銅板葺の工事が開始されました。またそれに並行して唐天井廻りの縁加工や壁の下地などが造られてきました。

幣殿・拝殿屋根銅板葺工事

・千木並びに鰹木の据え付け

幣殿・拝殿の造作と並行して、本殿の復元・整備が進められました。先人達の氏神さまへの篤い崇敬の念を後世に伝えるために、使用可能な旧本殿の御用材は補強加工して再び用いております。

四月中旬より、御本殿の屋根に千木並びに鰹木の据え付け工事が始まりました。今回の御本殿に据え付けられる千木はヒバの木が、鰹木は杉の木が用いられております。

本殿屋根への千木・鰹木据付工事

・素屋根の解体

五月中旬より、造営工事のために組んでおりました素屋根が解体され、日光に照らされ美しく輝く銅板葺の屋根をご覧いただくことが出来るようになりました。

この後、壁や天井などの内装や、拝殿前の石大工が行われ、八月末の竣功へと向かいます。

素屋根解体後の様子

関係境内工事

・参集殿前雨水・電気配管埋設工事完了

二月二十一日より約一ヶ月にわたり、参集殿受付前において、雨水・電気配管の埋設工事を実施いたしました。これは、雨水配管の経年劣化により、以前より雨天時に参集殿前受付周辺に雨水が溜まり、参拝者の皆様にご不便をおかけしておりました。今回配管を新たに埋設して雨水の排水を円滑にするとともに、本殿造営事業に関する電気配管を埋設する必要が出てきたため、併せて当工事を実施いたしました。

工事期間中は、西側窓口を閉鎖し、北側に臨時窓口を設置して対応いたしました。参拝者の皆様にはご不便をおかけして申し訳ございませんでした。

・境内照明灯の設置

昭和四十年代に設置された境内照明としての水銀灯も経年劣化が甚だしく、また水銀灯の製造が中止されたこと、そして新本殿周囲に新たにＬＥＤ照明を設置するのに併せ、ＬＥＤによる境内照明灯に改めました。またそれに伴い、境内照明灯へ電気を供給していた電線等も埋設化し、景観の整備を行いました。

埋設工事完了後の参集殿周辺

ご奉賛への御礼

令和元年十月より、氏子・崇敬者の皆様に御本殿創建四百年記念事業「令和の大造営」へのご奉賛をお願い申し上げたところ、数多くの方々から御篤志を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

「令和の大造営」に関わる今後の予定

◇お白石持行事

伊勢の神宮をはじめ、多くの神社では御本殿周りに白石が敷かれ、御敷地の清浄感を保っております。お白石は昔神々の降臨を仰いだ古代の磐座の名残を今に伝えるものと思われます。

当神社におきましても、新しく修復された御本殿の床下に「白石」を敷くお白石持行事を下記の通り実施いたします。

また、今年は「現在地への変遷」でも述べたように、「天石門別神社」が奥宮として現在地に遷座されてからも四百年目となることから、同時に天石門別神社の御敷地でも「お白石持」を行います。

清らかな水によって長い年月をかけ丸く浄められた白石を、大神様のお鎮まりになる社殿の周囲に敷き詰めるこのお白石持行事は、美しく生まれ変わった御社殿を正遷宮前に間近でご覧いただける貴重な機会となります。皆様お誘い合わせの上、どうぞご参加下さい。

【日　時】
令和四年八月二十七日（土）
及び八月二十八日（日）
各日：午前十時～午後四時
【受付場所】仮殿東側授与所
【参 加 費】無　料

◇正遷宮

令和二年十一月に地鎮祭を斎行して以来、一年十ヶ月かけて造営してまいりました新社殿が今年八月末に竣功いたします。その後、随神像や威儀物を据え付け、清祓を行い、そしていよいよ大神様を仮本殿より新本殿へ浄夜の中お遷し申し上げる正遷宮を、左記の通り斎行いたします。

当日は、仮本殿から新本殿周辺は規制させていただき立ち入ることが出来ません。また境内への車の進入は出来ません。ですが、規制の外から遷御の列をご覧いただくことが出来ます。

【日　時】
正　遷　宮
令和四年九月十九日（月・祝）
午後七時

◇奉祝祭・奉告祭

平成二十九年三月に第一回記念事業委員会が発足してより、御本殿創建四百年記念として遂行してきました「令和の大造営」の完遂を大神様に奉告し、お祝い申し上げる「奉祝祭」を、当神社の例大祭に合わせて左記の通り斎行いたします。

またその日の午後には、今回の事業に対して多くの方々にご奉賛の誠を捧げていただいたことを大神様にご奉告する「奉告祭」を斎行いたします。

【日　時】
奉　祝　祭
令和四年十月十日（月・祝）
午前十時
奉　告　祭
令和四年十月十日（月・祝）
午後二時

お白石持行事（しらいしもち）

氏子・崇敬者の手によって、浄められた白石を、大神様がお鎮まりになる社殿の周囲に敷き詰めていただく行事です。新しく生まれ変わった御社殿を正遷宮前に間近でご覧いただける貴重な機会です。どなた様でもご参加いただけます。お誘い合わせの上、どうぞご参加下さい。（事前申込不要）

【日　　時】令和4年8月27日（土）及び8月28日（日）
両日とも午前10時より午後4時まで
【受付場所】仮殿東側授与所
【参 加 費】無　料

新型コロナウイルスの当社の対応

●令和四年正月の様子

・初詣

新型コロナウイルス感染症の第五波が収束し、第六波が始まる合間であった初詣期間には、全国の神社同様当神社にも多くの参拝の方々がお越しになりました。

当神社では昨年同様に本殿前に混雑を緩和するため参拝者の列を蛇行させる対策を実施しました。また各授与所に飛沫防止シートを設置し、各所に消毒液の設置やマスク未着用者には無料配布などを行いました。

令和４年元旦の仮殿前の様子

・十日戎

今年の十日戎は、通常の三日間に戻して斎行いたしました。例年のように多くの方々が福笹を受けておられました。しかし新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、餅撒き行事は中止いたしました。

・人形奉焼祭

四月八日、恒例の人形奉焼祭が斎行されました。氏子崇敬者より持ち寄せられた多くの人形を祈祷の上、奉焼いたしました。

●春の花手水

氏子のご奉仕によりまして、三月末から四月上旬にかけて花手水をご奉納いただきました。新年度を迎えた参拝者の皆さまに爽やかな春の訪れを感じていただくことが出来ました。

春の花手水

●今後の神事について

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、残念ながら以下のように祭事を変更させていただきます。

◇大祓・輪くぐり神事

例年六月三十日午後二時から斎行しております「大祓・輪くぐり神事」並びに「人形祓神事」は、六月三十日早朝に神職及び総代のみで斎行し、「茅の輪」はその後、翌七月一日正午まで仮殿前に設置いたします。どうぞご自由にご参拝下さい。

◇夏祭

当神社において例年七月十三・十四日に斎行されております夏祭は「島下郡の祇園祭」とも称され、江戸時代より続く伝統神事です。しかし新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、今年も昨年・一昨年に引き続き、例年の神輿・太鼓の氏子地域への巡幸・巡行は中止させていただきます。

本殿祭並びに御旅所祭につきましては、石門会のご協力により斎行させていただきます。

これからの行事予定

◆夏祭（本殿祭及び御旅所祭のみ斎行）
七月十四日

◆お白石持行事
八月二十七日・二十八日
各日：午前十時～午後四時

◆末社琴平神社例祭
九月十日

◆天石門別神社御遷座四百年祭
九月十一日

◆本殿正遷宮
九月十九日　午後七時斎行

◆例大祭・遷宮奉祝祭
十月十日　午前十時斎行

◆遷宮奉告祭
十月十日　午後二時斎行

◆七五三詣
十一月中随時
祈祷者にお守り
おみやげ授与

◆末社恵美須神社例祭
十一月二十日

◆天石門別神社記念祭
十一月二十二日

◆大祓・除夜祭
十二月三十一日